

福祉文教常任委員会視察報告書
令和 7 年 10 月 20 日(月)～22 日 (水)

北野 めぐみ

1 岐阜県白川町議会

(1) インクルーシブ教育について

- ・ 平成 3 年に建て替えのため、1 年間、白川保育園が近くの小学校で生活するようになったことがきっかけとなった。休み時間等も、年齢を気にせずに、園児と児童が互いに認め合いながら、自然な交流が生まれた。
- ・ 平成 11 年に子育てに関わる課が集まるようになり、縦のつながりができるようになった。
- ・ 平成 22 年にモデル事業として、インクルーシブ教育の取り組みが本格的になった。
- ・ 各機関の関係者が年 3 回集まり、発達支援に関わる児童の情報交換を行い、「個別の教育支援計画」を作成している。この支援計画は、進級、進学と共に引き継ぎ、支援を途切れないように取り組んでいる。
- ・ 子どもたちにとっては、長年の継続した変わらないスタッフが対応するということは、信頼感と安心感が得られるのではないかと感じた。
- ・ 一人の子どもを、関係者、及び、地域の方々が一緒になり支えていることで、子どもの豊かな成長に貢献できる教育を展開していると感じた。

2 愛知県碧南市

(1) 幼老複合施設コリン

- ・ 地域のつながりが希薄化しつつあり、今後はさらに地域課題となるという問題意識のある中で、高齢者介護にとどまらず、地域で生活している子どもから高齢者まで安心して暮らせる地域づくりを願い、複合施設の開設により、地域のつながりを再構築したいという思いから、取り組みが始まった。
- ・ 子どもと高齢者、及び、障がい者が、共に生きる社会として、適度な距離感があり、他世代交流の可能となる場所となっている。
- ・ 医療福祉介護は困ったときに使うものであるが、仲間と協力していく機会であり、人を幸せにしていくための仕事である。
- ・ スタッフは沖縄県から採用している。
- ・ 病院は病になってからいくのではなく、病になる前からつながることで病を防止し、病気との上手なつきあい方をしていくことが大切である。
- ・ 施設利用者の写真の顔の表情を見ると、とても生き生きとしていることが感じられる。障がい者や高齢者も、支えてもらいながらも自分ができることは自分で行うことにより、支えられているだけでない自己有用性を感じ、また、子どもたちと接することも通して、生きがいを感じて元気に生活できているようである。
- ・ 核家族化が進む時代に、高齢者と接する機会が少くない中で、子どもたちはこの施設の中での生活を通して、思いやる大切な心が養われていると感じた。

3 滋賀県日野町

(1) 障がい者福祉・共生社会について

- ・ 障がい者就労施設「わたむきの里」は、現在 85 名の方が通所、日本最大級の規模である。
- ・ 町ぐるみで、障がい者児童を皆で支えている地域である。日野町にある小学校の 3 校と交流を 12 年間継続している。高校生や大学生も、ボランティアや学生スタッフとして関わりを持ってもらっている。わたむきの里福祉会の正規職員の内、5 人が高校生スタッフの出身である。
- ・ 行政だからできること、地域だからできること、それぞれの役割を活かしながら、継続的な支援を行っている。
- ・ U ターン就職率が 7% という地域の課題がある。小学校からの交流を通して、将来地域にとどまって働こうとする意識を育てることにもなっているのではないか。
- ・ 決まった就職先に到達するまでの働く居場所として、就労準備の場所として、中間就労の場であるこの施設の大切さを感じた。
- ・ すべての人が幸せになる社会を目指す福祉が厳しいことを指摘されていた。人と人との絆の希薄さがその大きな原因であり、人とのつながりをどのように結びつける施策を考えていくか、取り組んでいかななくてはいけないと感じた。